

文明と文化再考

公文 俊平

梅棹氏の文明論

私が『情報文明論』（NTT 出版、1994 年）を世に問うてから、もう六年たった。その間の情報化（デジタル化と分散システム化）の進展ぶりは、めざましいの一語に尽きる。

九〇年代後半に見られたインターネットの世界的な普及は予想通りだったが、それが韓国でここまで急速に伸びるとは考えていなかった。他方、日本での立ち後れは半ば覚悟していたこととはいえ、無念やる方ない。

それでも今年になって、日本でもようやく“IT 革命”という言葉が定着し、パソコン出荷の伸びも、昨年度は前年比四〇％を越えた。i モードにいたっては、ぶっちぎりといいたいほどの爆発ぶりである。これを見ると、日本でインターネット普及がここまで遅れたのは、供給側に責任の大半があると考えざるをえない。

ともあれこのあたりで情報文明論をもう一度見直してみたいと思って、ぼつぼつ作業にとりかかっていたところへ、わが国での比較文明論の大先達として、私がひそかに敬慕してやまない梅棹忠夫先生から、二冊の近著をご恵贈いただいた。『日本の未来へ 司馬遼太郎との対話』（NHK 出版、以下「対話」と略記）と、『近代世界における日本文明 比較文明学序説』（中央公論新社、以下『序説』と略記）がそれである。早速むさぼり読み、多くのことを教えられて堪能したが、中でも瞠目したのは、『序説』第一章の「娯楽の比較文明学 遊びの装置と制度」だった。また、「これから教育というものの目的があるとしたら、遊びの能力、いかにうまい遊びを発見・創造できるかというところにあると思いますね」（『対話』一一八ページ）という一九六九年の発言であった。私は、こうした議論に接して、これからの情報文明、あるいはさらにその先に来るとされる智識文明にあっては、日本の文明伝統が貢献するところ少なくないという希望と喜びを新たにすることができたのである。

以下、これら二冊の著書から触発された、文明と文化についての私なりの考えの一端を述べてみたい。

文明の分類枠組み再考

梅棹氏は、“文明”を、「装置群と制度群をふくんだ人間の生活システムの全体」（『序説』二六ページ）と定義する。もともと生態系の一部であった人間が、巨大な大脳とそれが行う精神活動を発達させることによって、人間＝自然系というシステム（生態系）から、人間＝装置・制度系というシステム（文明系）への移行が起こったという。装置群とはハードウェアであり、制度群とはソフトウェアだと、言い直してもよからう。また、ここでいう“制度群”には、宗教・思想や科学・技術のような制度化された情報・知識コンテンツ

も、当然含まれているだろう。

実は、『情報文明論』を書いていたときにも、梅棹氏のこの定義はもちろん承知してはいたのだが、今にして思えばそれに対する私の当時の理解はいささか不十分であった。そこでもう一度この定義に立ち戻って、文明の分類を試み直してみたい。

そのために、異なる文明の区分の基準として、装置系を構築・運用する知識の進化段階と、制度系を構築・運用する知識の進化段階の二つを考えてみる。そして、前者については、私がかつて採用した、(1) 採集・狩猟、(2) 農耕・牧畜、(3) 軍事・産業・情報というの三つの進化段階区分をそのまま残し、後者については、(0) プレ呪術 (1) 呪術、(2) (有史) 宗教、(3) 智識という四つの進化段階を考えてみる。そうすると、 $4 \times 3 = 12$ の分類枠ができる。

その上で、文明には、(1) 装置志向型 (手段・未来志向型でもある) と (2) 制度志向型 (目的・過去志向型でもある) の二つの基本型があると想定しよう。つまり、前者のタイプの文明は、その進化過程で手段に関する技術的な突破 (例えば、農耕革命や産業革命のような) に成功するし、後者は、目的に関する思想的・制度的な突破 (例えば宗教革命のような) に成功すると想定するのである。そうすると、装置系で突破する三つの文明と、制度系で突破する三つの文明、合計して六つの文明の基本類型が得られるので、前者を、始代・古代・近代文明と名付け、後者を呪術・宗教・智識文明と名付けよう。これらの名称自体は、私が『情報文明論』で提示した六つの文明類型と同じだが、ここでは導出の手続きおよび各類型に与える意味づけがいささか違って来た (望むらくはより洗練された) ことになる。(図1参照)

図1：文明の六つの基本類型

		呪術	宗教	智識
軍事・産業・情報			近代文明	智識文明
農耕・牧畜		古代文明	宗教文明	
採集・狩猟	始代文明	呪術文明		

すなわち、言語や手の使用を始めた人類最初の文明 (始代文明) が採集・狩猟技術での突破にまず成功する。それが“成長の限界”に達するころ、思想的・制度的な突破・統合としての呪術革命が起こって、呪術文明が出現する。それが“衰退の淵”に沈む頃、呪術文明圏の辺境部に出現してくる古代文明の中で農耕・牧畜技術での突破がなされる。この古代文明の成長の限界は、有史宗教の開発と普及によって思想的に突破され、新しい統合が達成される。だが、宗教文明もやがては衰退して行き、その辺境部に出現した近代文明は、軍事・産業・情報技術の突破を通じて新しい発展をなしとげる。しかし、それもまたいずれは成長の限界に直面することは不可避であって、そこに発生する混乱と危機の中から、より高度の思想的・制度的な突破と統合の能力をもった智識文明が出現してくる、というのが図1の背後にある私の筋書きである。

文化の定義再考

問題は“文化”の定義である。梅棹氏の与えている文化の定義には、二通りのものがある。ひとつは、文化を「[人間の]精神面への[文明の]プロジェクション」、つまり「文明のなかにいきている人間の側における、価値の体系」(『序説』二二ページ)だとする定義である。いまひとつは、全体としての言語とその個々の単語というアナロジーを文明と文化の関係にあてはめて、文化は「ひとつひとつの単語」(『序説』四五ページ)のようなものであって、社会科学としての文明学が生物学における生態学に対応するとすれば、文化は形態学に対応する(『序説』七四ページ)という見方である。

しかし、文明学を生態学に対応させるのはいいとして、文化学を形態学に対応させるのはどんなものなのだろうか。少なくともそれは、文化を「人間の側における価値の体系」だとする見方とは整合しない。私としては前者の定義により親近感を覚える。そして、「人間精神が存在し、人間精神が発動をしてなにものかをつくり、そのつくりあげたものと人間とがシステムをくんで生活してきた」(『序説』二三ページ)という言明に深く共感しつついえば、存在し発動している人間精神の特質、つまりある文明の中で人間が通有する価値観や世界観こそが“文化”と呼ぶにふさわしいものではあるまいか。私にいわせれば、この意味での文化は、文明の中に生きる人間が「ほとんどそれと意識されないままに学習・適用・伝達されていく、人間の行為のさまざまな側面の採用原理の、ひいては文明の設計原理の複合体」(『情報文明論』一七ページ)に他ならない。つまり文化は、文明の人間精神への投影であると同時に、文明そのものの構成原理でもある。

文明の構成原理としての文化、なかんずくその個々の構成要素としての“文化子”は、生物学とのアナロジーでいえば、“遺伝子型”にあたる。それに対しシステムとしての文明を構成する個々の要素としての“文明素”(これが実は、梅棹氏の第二の定義における文化にあたる)は、“表現型”にあたるだろう。

それでは、個々の文化子を観察したり同定したりすることは可能だろうか。将来、脳のニューロン・ネットワークの解析が可能になればともかく、現時点では、遺伝子の化学的な構造を明らかにするのと同様な意味での文化子の観察や同定は、まず不可能だろう。それならば、生物学者が遺伝子の特質を、それが規定している表現型の特質に引き寄せて、たとえば“髪の毛の色を決める遺伝子”などといったりするのと同じように、文化子の特質は、文明素の特質に引き寄せて記述するのがもっとも手っ取り早そうだ。

しかし、梅棹氏が繰り返し強調しているように、文明学は生態学に対応する。つまり、それは、個々の有機体のレベルでの種の表現型(形態学)を問題にしているのではない。いってみればそれは、生態系の表現型を問題にしているのである。だとすれば、同じことは(文化の第一の定義に立脚する)文化学についても、当然妥当しなくてはならない。

その意味では、文化学がまず注目すべき文明素としては、言語の用語法の特徴があげられよう。つまり、ある文明(ないしその分枝)が共通に使用している言語の特質の中に、

文化の特質を求めるのである。たとえば、韓国人として日本語を学んだ呉善花さんが驚愕した日本語独特の受身形（「子供に先立たれた」とか「雨に降られた」）は、日本人の世界観においては万物が相互作用しあっており、その結果が“私”を取り巻く世界状態にさまざまな形で影響を及ぼしていることを示している。また、行政改革論議などにさいして決まり文句のように言われる“変化への対応”は、日本人の間では他者制御よりは自己制御、自己改革にまず向かいがちな、対応型の行動が多いことを示している。もちろん、自己改革をしないでがんばって“嵐の過ぎ去る”のを耐えてまつのも、対応行動の一つの形である。また“自己”には、自分と一体視されている“モノ”（愛車等）もしばしば含まれる。

言葉の使い方の特徴から文化の特徴を引き出すような研究が、系統的に行われて欲しいものである。

（二〇〇〇年八月一二日稿）